

## 大正期の新舞踊

村松 道弥

私は今はジャーナリストですが、大正期はただ音楽と舞踊が好きな愛好者でした。洋舞は今ではバレエと現代舞踊と二つに分かれています。当時は、邦舞と洋舞という分類でした。新舞踊という語はどちらかという、邦舞の方の新しい舞踊運動につけられた言葉と思います。

私は大正5年、17歳の時に東京、本郷座で石井漠の舞踊詩「明闇」を見たのが舞踊の見はじめでした。ですから、それ以前の事はものの本を見てお話しします。

**帝国劇場** まず、洋舞の新舞踊の原点になる、石井漠、高田せい子、小森敏、という明治末期の舞踊家がどうして生まれたのか、その背景になる帝国劇場について述べなければなりません。昔の帝国劇場は、今日のビルディングとは違って、西洋の劇場建築のように、両側に広い広場があり、皇居の向かいにふさわしい、ゆったりとした空間の建て物でした。屋上には翁の像が飾ってありました。財界の渋沢栄一、大倉喜七郎、等が中心になって、皆がお金を出し合って、西洋の国立劇場に代わるものを作るのが意図でした。客席は3階迄で舞台は広くて使いやすい劇場で多くの舞踊やオペラが上演されました。しかし、財閥がやりましたから、経営の問題でしょうか、結局、歌舞伎が中心の興行でした。劇場は今までの歌舞伎座、新富座、本郷座、等の桝席を排除しまして椅子席にし、食堂を設け、入場券も茶屋制度の販売という旧弊を撤廃しました。

帝国劇場では、他に女優劇をつくろうとして女優を養成しましたし、柴田環（後の三浦環）を連れてきて、歌劇の上演を企画し、歌劇部をもうけ創作歌劇「熊野」を上演しました。歌劇部の第一期生の中に、後に舞踊家になった石井林郎（後に石井漠）、柏木敏（後に小森敏）、原せい子（後に高田せい子）の三人がいました。原せい子は、はじめ声楽の原信子の養子だったのですが、途中から舞踊に転じました。第二期生には高田雅夫（原せい子と結婚）、石井行康、等がいました。石井行康（現在、バレエ振付家として活躍している石井潤の祖父）は、浅草オペラ、宝塚少女歌劇の講師になり、京都に研究所を設けました。

伊藤道郎は歌劇部の柴田環の弟子で「熊野」でエキストラに出ています。舞踊の方では出てい

せん。「舞踊学13号別冊」に片岡康子さんが「伊藤道郎はローシーの弟子」と書いてありましたが、この記述は誤りです。伊藤道郎は声楽希望で、19歳でフランスに渡りオペラを聞きますが、その声量の違いに驚きます。パリでディアギレフバレエのニジンスキーの「バラの精」やイサドラ・ダンカンの舞踊を見て舞踊を目ざすのです。ある時、新聞でドイツ、ドレスデンのダルクローズの学校のリズム体操を見て、すぐに見学に行き感激、そこに入って2年間勉強しました。ですから、伊藤道郎はダルクローズの系統の人です。第一次大戦の開戦の前日、ドイツを逃れてロンドンへ行き、能の「鷹の井戸」を舞踊化し、好評を得ます。その評判を聞いて、今度はアメリカに招かれます。「伊藤はアメリカ芸術舞踊の草分けで、フランス近代音楽をアメリカに紹介したことと、イサドラ・ダンカン系の踊り手」と本に紹介され、高い評価を得ています。

**浅草オペラ** 大正3年、高木徳子がアメリカから帰国、日本最初のトウダンサーというのを売り込んで、帝劇等で踊り、しばらくして、オペラ、舞踊の作、演出家・伊庭孝と組んで、浅草に進出、川上貞奴一座とも合同して、甲府、等で公演を行っています。

大正5年、石井漠は、いままでの洋楽伴奏の舞踊でない“舞踊詩”を発表します。これは、ドイツから帰ってきた小山内薫と山田耕筰のすすめでダルクローズのリズム体操の話が基になっています。つまり小山内薫の新劇場第1回公演で、30人の観客でした。第2回の本郷座の時は観客が6、7人。私は見えています。「明闇」を小森敏と踊りました。大変面白い作品でして、二人はなかなかいいコンビでした。「明闇」はその後、石井みどりさんや門弟と何回か上演しています。第3回は、劇場をさけて、保険協会ホールという所で上演しています。石井漠の舞踊詩運動はこれで終わります。

大正5年7月、帝国劇場附属歌劇部、洋劇部は解散します。石井漠は、新劇場第3回公演を終えて、宝塚少女歌劇に振付師として、就職します。

大正6年、小森敏は一時故郷に帰っていたのですが、大阪近松座で石井漠と小森敏で近代舞踊大会を開き大好評を得ます。これが売れて1500円の

ギャラで京都公演も行います。ギャラをもらって踊ったはじめということです。

高木徳子は川上貞奴一座と合同して地方巡業して大正6年帰京、東京赤坂演技座で独立して公演し、あと浅草常盤座、等にも出演しました。

大正6年10月、流行新作家の佐々木紅華が中心となり、東京歌劇座が浅草日本館を本拠に誕生、石井漠も参加します。

当時、帝国劇場が最低三階席で1円の入場料だったのが浅草では10銭でみたのですから大変なにぎわいをみせました。金竜館のオペラ、常盤座の新派、キネマ倶楽部の映画と三館共通で15銭という時もありました。私もよく通ったものです。

浅草オペラは、大正6年1月、伊庭孝と高木徳子の一座が常盤座で上演した「女軍出征」というオペレッタが始まりとされています。第一次大戦当時の流行歌「ダブリン・ベイ」や「チップラリー」などを入れたしゃれたものでこれが、大ヒットします。それから高木徳子の「スネイクダンス」を見ましたが、大変好評でした。

大正7年4月、伊庭孝、高木徳子、高田雅夫、等で「歌舞劇協会」を作り、同年10年有楽座での「歌舞劇協会」での公演ではハプトマ原作の歌舞劇「沈鐘」を石井漠と高木徳子が共演し好評でした。

大正8年清水金太郎（帝国劇場声楽講師）、清水静子、田谷力三、安藤文子、等が「七星歌劇団」を結成、金竜館で上演します。このように、集散いとまなく浅草オペラは全盛をきわめます。

浅草オペラは大衆的であると同時に、大衆にこびなければならぬ所がありました。一日三回、日曜・祭日には一日六回興行という事がありました。

石井漠は「浅草じゃ芸術は育たない」と感じて、日本館をやめ、根岸興行に移り、地方巡業に出ます。そして、ドイツに渡ります。

高田せい子も根岸興行に籍を置きましたがゆきづまって休養と新しいネタを仕入れるためにニューヨーク、パリ、ロンドンの巡業に出ました。

大正12年9月、関東大震災の報を聞いて、高田せい子は大正13年帰国、赤坂に舞踊研究所を設けます。石井漠は大正14年帰国、石井小浪と武蔵境に舞踊研究所を設けます。

二人とも、結局、浅草へは帰らないのです。いままでの浅草オペラの興行は、バラエティーで、寸劇とか、舞踊、等がまざり合っているのです。今度は舞踊家として独立し独自性をもって活動を続けなければということになるわけです。これが日本の洋舞の始まりと言っていいと思います。

**その他の活動** 小森敏は、ニューヨークで、山田耕筈、伊藤道郎と舞踊会をやっています。小森は

東洋的なもの、伊藤は剣をもって「鞭声<sup>べんせいしよくしよく</sup>粛々」を踊ったということです。この後小森はフランスで東洋舞踊研究所を12年間開設するのですが、どうして12年間もやれたのか研究の余地があると思います。帝国劇場ではローシーが洋舞の教師ですが、邦舞に水木歌若と先代若柳吉登代がいたのです。小森はそこで邦舞を勉強しているのです。石井漠にも東洋的なものがあるといいますが、そういう所に外国にも受けたことがあるのかもしれませんが。

以前、小森と永田龍雄と渥美清太郎と私で吉登代の家に遊びにいった事があります。その時、渥美さんの三味線で小森が「梅にも春」を踊りましたが見事なものでした。それから藤蔭静枝（後に静樹）がパリでリサイタルをした事がありますが、二人で「かっぱれ」踊って好評を得たそうです。やはり、東洋的なものを持っていたので12年間やれたのだと思います。

岩村和雄は、築地小劇場の照明をやっていたのですが、「ダルクローズのリズム体操を照明にとり入れてやってみたい」とドイツに渡るのですが、やはり照明ではダメで、肉体だと解り舞踊家に転向します。ただ、舞踊家では食べていけないので再び築地小劇場で照明をやりながら俳優にリズム体操を教えていました。

山田五郎は、築地小劇場の事務にいたので、岩村和雄からリズム体操を学び、「猩々」というすぐれた舞踊を作ります。山田は小さい時、能を習っていて、そういう東洋的なものがアメリカで受けたようです。

その頃、舞踊研究所が次々独立して開設します。帝国劇場には世界の一流の人々がやって来ました。アンナ・パヴロバ、アルヘンティーナ、梅蘭芳、デニーショシ、等が来日し音楽・舞踊の普及、ファンの拡大に果たした功績は大です。

今と違って大変いい時代で、一度東京で評判をとった作品は、はじめは持ち出しですが地方興行として売れました。それで儲けて赤字をうめていまして、大正の末から昭和の初めにかけて門下生が次々育ちます。

石井漠門下では、妹の石井栄子、姪の石井郁子、崔承喜、石井みどり等。

高田せい子門下では、藤田繁、益田隆、江口隆哉、等。

岩村和雄門下では、三木一郎、千葉躬春、等です。そして又その孫弟子と今日の洋舞が盛んになったのです。

**邦舞** 邦舞の方の新舞踊は、この後のシンポジウムにゆずりますが、やはり先覚者は藤蔭静枝（後の静樹）です。

大正6年5月、第1回藤蔭会を常盤木倶楽部（今の東京日本橋、西川ふとん店横）で開催しま

した。集った人は藤間静枝（後に藤蔭静枝，静樹）藤間藤代，藤間勘次の三人。この時は新しい作品はなかったのですが，第8回大正9年11月，に新しい作品，香取仙之助作の「浅茅ヶ宿」を発表，第9回大正10年5月，には「思凡」を発表しました。これは，帝国劇場で梅蘭芳も演じたもので，福地桜痴居士の息・福地信世が中国の昆劇のスケッチを50枚位書いてきまして，「伝統の呪縛からの解放」を象徴，大変な好評を得ました。藤蔭静枝が新舞踊家として確立した作品です。その他には，第11回大正11年11月，宮城道雄の器楽曲「落葉の踊り」と「秋の調べ」を踊っています。当時，新しい作品でも歌詞のあるものだったのですが，無歌詞のものを初めて手がけて評判を得ています。岡田嘉子，等門弟の人達も踊っています。

邦舞の方も，帝国劇場が招いた外国の各舞踊家たちの影響を受けて，次々と新しい舞踊家が出てきます。

花柳徳次（後に花柳珠実，五條珠実）は，大正8年4月花柳徳太郎の柳桜会で，新曲「文ぐるひ」を踊り，同年11月同会で，“新舞踊”とうたって「惜しむ春」を踊っています。珠実の傑作は二世花柳寿輔（後の寿応）の「第2回花柳舞踊研究会」（大正13年9月）で踊った「春信幻想曲」です。これは町田博三（後に佳聲）の作曲，バイオリニストの鳥居維子の和洋合奏曲で，浮世絵の春信描く笠森おせんと若衆とのデュエットで，画期的な作品でした。

花柳寿勇（後に花柳寿美）という人も「花柳舞踊研究会」で活躍，後に曙会を作ってスケールの大きな新舞踊を作りました。

三人共，新橋の芸者の出身でしたが，芸者をやめて，舞踊家として独立して立った人達です。

林きむ子の「銀閃会」などもありますが，その後，令嬢舞踊家が三人出て参ります。西崎緑は西川流から独立，高橋是清の孫・藤間観素娥は茂登女会，そして藤間喜与恵は「喜与恵会」で新舞踊を発表しております。

この後シンボジウムに出られる吾妻徳穂さんは15世市村羽左衛門と藤間政弥の子で，藤間春枝として昭和5年春藤会をもって舞踊家として出発，新舞踊でも大活躍します。

歌舞伎俳優の人達の新舞踊の活動もありますが町田博三は中外商業新報に「歌舞伎の人達は流行に追われて充分準備をしないで会を開いていたので早く途切れてしまった」と書いています。

\*1990年度秋季第30回舞踊学会  
『舞踊學』14-1号より転載